

企画事業「青少年を対象にした先導的・モデルプログラム」
文部科学省委託事業

「30日間セルフチャレンジキャンプ！」

平成22年9月1日（水）～9月30日（木）
（29泊30日）



I 事業の背景

全国でひきこもりは300万人を超え、ニートは2015年には約150万人以上になると言われている。このような青少年問題は深刻化しているのが現状である。当機構においては「課題活性化プラン」を策定し、緊喫な課題に対応した事業を推進している。

当所においては長期宿泊型事業のモデル事業として文部科学省の委託を受け「30日間のセルフチャレンジキャンプ」を実施し、教育施設の行う自立支援事業プログラムの開発をすすめている。

II 事業の概要

1 趣 旨

不登校、ひきこもり、ニートなど特定の状況にある青年に対して、30日間ボランティアメイトと共同生活しながら、酪農、農業などの社会体験を行うことにより、人間関係力の向上、就業意識、職業観を培う。また、30日間の生活を通して規則正しい生活リズムや生活習慣の習得、体力の増強を促進し、0合目からの富士登山チャレンジにより「自信」と「生きる力」を身につける機会とする。

2 参加対象

ニート、ひきこもり、不登校の状況にある16歳以上の青年、概ね10名

3 参加状況

9名（男7名・女2名）

4 企画のポイント

(1) 事業の特色

本事業のプログラムデザインは柔らかなコミュニケーションを学ぶことから始め、0合目からの富士登山を目指すというストーリー性を重視した。

ボランティアメイトが、絶えず仲間の視点で参加者の課題を捉えて、解決のために働きかけ、関わることから共に支え合う関係に高めていくことで支援を行っていくことも、この事業の特色である。

(2) 事業の内容

① 青少年交流の家の「独自性」を活かし、参加者とボランティアメイトがお互いに協力し30日間の共同生活を行う。すべてミーティングを基本に食事、清掃の分担から休日のプログラムまで計画する。

② 体験活動及びプログラム（地域の教育資源の活用）

【社会福祉法人「野菊寮」】（知的障害者更生施設）5日間

・ 宿泊棟の壁補修、生活プログラムの補助、交流

【勝又牧場】（家族経営の牧場）3日間

・ とうもろこしの刈り取り、牛舎作業、乳牛の世話

【NPO法人古民家ダイホームたまほ村】

（指定通所介護施設）3日間

・ 施設清掃、送迎補助、料理、交流など

【NPO法人御殿場市乗馬普及振興センター】5日間

・ 施設整備、馬房掃除、馬の手入れ、体験乗馬



【共同作業で支え合う人間関係を築く】



【“いっしょにやる感”を大切に】

③保護者のつどい

保護者に対して参加者の変容と今後の保護者の対応について理解を深めるために有識者の講義と懇談を行う。

④自分自身へのチャレンジ！修学登山

0合目からの富士登山（村山古道）4日間

⑤発表会

保護者、受入機関などの関係者を招き、参加者、ボランティアメイトが共同企画して「事業報告会」を行う。

Ⅲ 事業ノウハウ

1 広報ノウハウ「背中を押すひとと出会うことから」

自立支援事業において広報はもっとも難しい課題であると言える。第1の広報先は地域に存在する自立支援機関、若者向けの就労支援機関など、日常で青年たちと向き合っている機関に対してのアプローチが必要である。もちろん、事業内容においてもそれらの機関のニーズに合わせることも重要である。「背中を押す人」との出会いが広報の重要なポイントとなる。

2 事業ノウハウ「何よりも“いっしょにやる感”での食事づくりが効果的」

宿泊型の自立支援事業においては「日常をプログラム化」していくことが重要である。まず何よりも効果的なプログラムは「自炊」である。参加者、支援者が「いっしょにやる感」を大切に食事づくりを行うことで普段コミュニケーションが苦手な参加者も自然な会話を引き出すことが可能である。また自炊は「おいしい」「ごちそうさま」という言葉から達成感とともに「自己有用感」も感じる事が可能である。

3 事後ノウハウ「変容を連携機関に伝えることから」

宿泊型施設での自立支援事業は参加者にとって非日常である。この場での変容をどう日常につなげていくのか？このことが重要な課題になる。まずは地域の機関に関わっている参加者であれば、プログラムの中で生じた変容などを機関にフィードバックしていくことが大切である。機関にとってフィードバックされた情報は本人の適性や可能性を知る重要な機会であり、これによって新たな就労訓練計画の策定や就労先の紹介をすることが可能になる。このように自立支援事業は地域機関との連携なしには成立することができない事業なのである。

Ⅳ 成果と課題

1 成果

参加者の変容では1週間前後で生活習慣の改善が見られ、2週間前後でコミュニケーションに大きな変化があった。参加者は笑うようになるなど表現が豊かになり、行動面では仲間のフォローができるなどの行動の変化が見られるようになった。3週間前後では全体的に参加者の意欲の向上が見られた。参加者のキャンプ後では、事後活動で社会参加が顕著に見られている。

2 今後の課題

参加者の課題解決をめざすためには、本事業と日常をつなぐ個別支援との連携が必須である。当所が参加者を日常的に個別支援することは困難である。そのために事業実施前、中、後において地域に存在する自立支援機関との連携を密にする必要がある。とくに事業運営中の視察、訪問や機会に応じての団体紹介や事例紹介を行うことで参加者の日常へのアプローチが行き届くように配慮していくことが重要である。

担当：企画指導専門職 北見 靖直